

〈特別活動〉

よりよい人間関係をつくる学級活動の工夫 ——話し合い活動のプロセスを意識した指導を通して（第1学年）——

西原町立西原東中学校教諭 高江洲 く み

I テーマ設定の理由

現代社会はグローバル化が進み、国籍や性別、年齢、価値観、意見や考え方の違いを超えて、多様な人間が関わり合いながら共に生きていく社会へと変化している。教育現場においては、児童生徒の規範意識や社会性の低下、低い自己肯定感やコミュニケーション不足などがいじめや不登校、学級崩壊といった社会問題の要因となっている。これからの社会と児童生徒との関わりを考える時、多様化・複雑化した人間関係において、よりよい関係づくりを図ろうとする態度を育てることは大きな課題である。特別活動においても、学習指導要領の改訂に伴い「人間関係」という文言が新たに目標に追加され、学校教育の基盤としての特別活動の役割がより一層期待されていること、その中でも学級活動において話し合い活動を充実させることが示されている。

しかし、中学校現場において自身のこれまでの学級活動を振り返ってみると、講話や行事後の感想や反省を書くだけの活動や生徒会行事等のテーマ決め、簡単な学級行事の取り組みなどが多く、生徒同士の深い関わり合いを重視した取り組みには至らなかった。その原因として、教師主導型の指導であったこと、時間的な制約を理由に話し合い活動の時間を確保しなかったこと、話し合い活動の意義を深く意識せず、活発な話し合い活動につながる手立てが不十分であったことなどが考えられる。つまり生徒同士の話し合い活動の中から、生徒自身が何に気づき、何を実践し、そこから何を学んだか、という視点が欠けていたのである。

特別活動における教師の役割は、生徒が相互の意見交流を通して共に学び合う楽しさを知り、自分の思いを伝えたいような状況を設定することである。また、課題解決に向けて協働し共に支え合いながら成長していこうとする態度を育むことであり、生徒自身の主体的な学びへの支援である。

これを踏まえ、本研究では学級活動における話し合い活動の在り方を検討すべく基本的なプロセス（問題の共有、計画、話し合い、実践、振り返り）を見直し、工夫、改善していくための手立てを考え、話し合い活動の活性化を図っていく。しかし35時間の限られた学級活動の時間で、毎回話し合い活動を準備し、すべてのプロセスを踏まえた指導は難しい。そのため、年間計画と話し合い活動のプロセスを照合し、指導内容によってはプロセスを部分的に取り入れることで柔軟に対応していく工夫が必要である。このことは今まで時間的な制約から話し合い活動を取り入れることができなかった課題解決にもつながると考える。それぞれのプロセスの持つ意義をしっかりと捉え、それを意図的に学級活動に取り入れることで、教師の関わり方が変わり、生徒の自主的・実践的な活動へと変換が図れるのではないかと考える。

このように、よりよい人間関係は課題解決に向けた生徒の主体的な話し合い活動によって育まれる。生徒は多様な意見や価値観のぶつかり合いを経験しながら互いの立場を理解し、話し合いに折り合いをつけて合意形成を図ろうとする。話し合い活動によってよりよい人間関係を築こうとする態度は、これからの社会において最も求められる能力のひとつである。話し合い活動という手段を通して、よりよい人間関係を築いていきたい。

〈研究仮説〉

学級活動において、生徒が主体的に関わり合う話し合い活動のプロセスを意識した指導を行うことで、話し合い活動が活性化し、よりよい人間関係を築こうとする態度が育まれるであろう。

II 研究内容

1 よりよい人間関係とは

人間とは文字通り「人の間」で生きる存在であり、他者との関わりによってその成長もなされる。では、その関係性において「よりよい」とはどういったものなのだろうか。学校や学級の集団生活において、生徒が多様な関わりをもって互いに信頼し合い、尊敬し合い、協力し合う関係が築ければ、所属感や連帯感が強まり、問題が起こっても主体的に解決できるようになる。それがよりよい人間関係というものに違いない。しかし集団で生活している限り、様々な欲求の対立による意見のぶつかり合

いが起こったり、逆に他者に対して関心が薄く他人任せになることでいざこざに発展するといった状況が起こったりする。人間は一人一人違うのだからそれも当然のことであり、むしろこの違いがあるからこそ互いに理解し合おうと努力し、問題に対してより真剣に取り組もうとするのである。このように考えると、一見人間関係が好ましくない状況も実はよりよい人間関係づくりの一面ととらえることができる。

人間関係の対立について添田晴雄（2010）は、集団内に今まで培ってきた人間関係を「貯金」という言葉で表し、衝突や対立が起こった時にその「貯金」を使って困難を乗り越えていくのだと説明している。そして、その経験と成功記憶が子どもたちの人間関係形成能力となって身につき、それがまた新たな「貯金」となる。結果的に「貯金」が増え、以前にも増して人間関係が良好になる。ここでいう「貯金」とは、異なる意見や考え方を知り、自分というものを見つめ直す過程を通して築いてきた経験や体験のことだと考える。つまり信頼し合い、協力し合う良好な関係がいわば流通するお金として重宝される一方で、マイナスイメージを持つ対立や困難も「貯金」の一部となって、よりよい人間関係を築く財産となるのである。

今までの経験を振り返ってみると、学校行事における合唱コンクールの取り組みがそのいい例であった。合唱コンクールではよく男女間で対立が起こったが、最終的に子どもたちの感想には「いろいろあったけどみんなで取り組めてよかった」といったものが多かった。最初は意見や考え方の食い違いから、相手のことが嫌になり怒ってばかりだったが、次第に思い通りにならないことをどうしたらいいのか悩み考え、相手の言い分を聞き、譲れるところは譲るという過程を通して、子どもたちは人間関係づくりの難しさを肌で学んでいったのである。その経験こそが人間関係の「貯金」だといえる。このように、対立や困難な状況においてでさえ、結果的によりよい人間関係をつくろうとする資質と態度を育てることにつながるのである。学校で育むよりよい人間関係を考える上で、人間関係の対立が果たす役割にも目を向けるべきである。

そこで、本研究における「よりよい人間関係」を意見の対立や衝突から生じる解決困難な状況も含めて、相互理解の難しさや大切さを理解し、互いに認め協力し合える関係を築こうとする態度ととらえる。学校や学級の集団といった特質を活かして、互いに関わり合う場をできるだけ多く設定し、個々の個性を尊重しつつ協力、対立しあって関係性を深めさせていく。その中で、人間関係に不安を抱いていた子どもたちや「周りは関係ない」とそっぽを向いていた子どもたちが少しずつ学級に自分の居場所をみつけてくれたらと願う。そして、集団としての関わりを深めていく過程で、何がよりよい人間関係なのか、どうすればよりよい人間関係は築けるのか、子どもたちに問いかけていきたい。

2 話し合い活動の充実に向けて

(1) 学級活動における話し合い活動の意義

人と人が関わり合う集団生活において互いに理解し合うためには様々なコミュニケーションが必要である。特にその集団が国籍や年齢、性別の違いなど多様であればあるほど、互いの関係に問題が生じやすく、話し合いで解決方法を模索していくしかない。多田孝志（2001）によると、グローバル時代の対話の機能は、互いの情報を伝え合う「情報の共有」、参加者が叡智を出し合って新たな解決策や知恵を生み出す「共創」、話し合うことにより相互理解や相互親和を深める「人と人とのかわりづくり」であると述べている。そして参加者が協力して利害の対立の現実や相互理解の難しさを認識しつつ、叡智を出し合い、新たな価値や解決策を生み出す深い対話を「共創型対話」と呼び、その力をつけることが21世紀に生きる子どもたちに必須であると述べている。

最近の子どもたちは、携帯電話やSNS等の普及により「情報の共有」が活発になされ、それをうまく活用した「共創」という部分においてはその機能が割と果たされていると感じる。しかし、「人と人とのかわりづくり」という現実的な機能においては、いじめや不登校等の問題を見る限り十分とはいえない。人と人のつながりは集団で育まれるものであり、社会の縮図といわれる学校・学級はその大きな役割を果たしている。特に学校生活の基盤である学級において、話し合い活動を計画的・継続的に実施することにより、よりよい人間関係を築く力、協力して集団の生活を充実・向上させようとする態度、当面する課題に主体的に関わろうとする態度、社会に参画する態度や自治的能力の育成が図られていくのである。

これからの時代は変化が激しく正解が見えないと言われているが、人と人とのつながりは人類が存続していく限り続いていくものである。人と人をつなぐ話し合い活動を、学級という小さな集団が

ら将来の社会に向けて実践し、人との関わりを大事にしながらしっかり自立して生きていける子どもたちを育てていきたい。

(2) 話し合い活動におけるプロセスの重要性

話し合い活動のプロセスとは、学校・学級で起こる問題や自分の生き方に関わる個人的な問題を主体的に解決していく過程である。その流れは問題の共有から始まり、計画、話し合い、実践、振り返りへと続く（図1）。ただやみくもに問題について考えさせるだけでは、生徒の自主性を引き出すことにはならない。問題を解決したいという思いとそれに伴うアクションが起こらない限り解決には向かわないのである。その手立てとして話し合い活動のプロセスがあり、それぞれのプロセスの持つ良さや意義を理解したうえで、見通しを持って問題を解決していく方法を学ぶことが大切である（表1）。

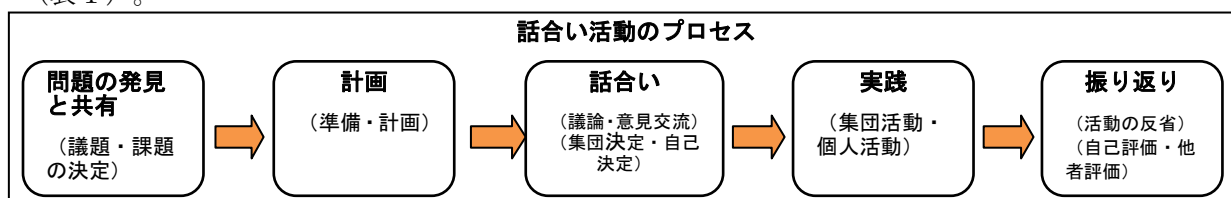


図1 話し合い活動のプロセス

表1 話し合いのプロセスとその意義

プロセス	意義	生徒の活動	留意点
問題の発見と共有	- 話し合い活動の開始であり最も重要な部分。すべてのプロセスを通じて意識することにより充実した話し合い活動につながる。 - 切実な共同共通の問題として共有し、話し合う必要性を意識する。 - 自己の生活の充実と向上に関心を持つ。	- 困っていることや解決すべき事柄について帰りの会などでみんなに呼びかけたり、教師に相談したりする。 - 仲間のために一緒に解決していこうとする。 - 問題解決に向けて自分の考えをまとめる。	- 年間指導計画に設定された題材を扱うが、場合によっては直面する問題を取り上げる。 - アンケートや生徒観察、教育相談などから実態を把握する。 - 学級内の支持的風土をつくる。
計画	- 共有する問題を整理し、どのように話し合いを進めていくか見通しを立てる。 - 司会等の仕事を分担し、リーダーとしての資質や自己存在感を高める。	- 話し合いがうまくいくように計画委員と協力する。 - スムーズに話し合いができるように計画、準備を行う。	時間になったとき、折り合いがつかないときにどうするか見通しを立てさせる。
話し合い	- 問題の状況を把握し、自分の意見や考えを理由づけて説明することで、論理的思考が高まる。 - 他者の多様な意見を聞くことで、多角的に物事を捉えることができる。 - 生徒相互の関係性が深まる。 - 客観的な視点で集団決定や自己決定を行う。	- 話し合う内容を理解する。 - 自分の意見を伝え、相手の意見を聴く。 - 相手の意見の違いや立場の違いを理解する。 - 何に取り組むか、集団決定や自己決定を行う。 - 朝の会や帰りの会でも行う。	- 全員が意見交流できるようにペア、グループ、学級全体など話し合い形態を工夫する。 - 意見の可視化、操作化、構造化を図る。 - 合意形成を目指して折り合いをつけさせる。
実践	- 集団決定や自己決定したことを実践する。 - 生徒の自主性を促し、生徒主体の活動から自治的集団への発展を図る。 - 互いに関わり合い協力することで、よりよい人間関係を育む。	- 集団決定したことには、自分の役割に責任を持って取り組む。 - 自己決定したことには、自主的実践的に取り組む。	- 個々の生徒の能力や特性に応じた活動の場や機会を考える。 - スムーズに実践が成されているか経過を観察し、激励する。
振り返り	- 自己評価や他者評価を通して、自己理解や他者理解を深める。 - 協力し合って取り組むことで、自己肯定感や自己有用感が生まれる。 - 自己成長の自覚を促し、新たな活動の意欲を高める。	- 自己評価や他者評価を通して、互いの良さががんばりを振り返る。 - 新たな活動へとつなげる。	実践を振り返り、取り組みを続けるか、終わらせるか、新たに話し合って決めるか、全体で確認する。

(3) 話し合い活動のプロセスの特質

話し合い活動を実践するとき、まず話し合う問題が切実で解決しなければならないという意識を生徒に持たせることが最も重要である。たとえそれが自分にとって問題でなくても、学級の仲間のために一緒に考えていこうとする共感的な態度が話し合い活動を成功させる鍵になる。これが「問題の共有」である。問題の共有がうまくいかないと、その後の話し合いは表面上のものとなり、互いの深い関係性も生まれてこない。そのため問題の共有が上手く図れるように、すべてのプロセスでそれ

を意識させることが大切である。同様に問題提起や意見交流がスムーズにできるような受容的な雰囲気作りを日常から学級経営で行っておくことも必要である。

問題の共有が成されたら、話し合いがうまくいくように「計画」を立てる。学級の団結力や自治力を高めるためにも生徒同士が自主的に計画を立てて進めていく。事前に話し合う問題について自分の意見をまとめさせておく

ステップ1	いろいろな意見があることを知る
ステップ2	集団決定の重さを理解する
ステップ3	みんなも自分もいい方法を見つける
ステップ4	決定には気持ちよく従う
ステップ5	心遣いをしながら活動する

図2 折り合いのステップ

と、時間の短縮だけではなく深く広がりのある話し合いへと発展しやすい。

「話し合い」の場面では、多様な意見を出し合い自己の価値観を広めていくことが大切である。その際たとえ対立や衝突が起こっても、それがよいよい人間関係づくりには必要であることを踏まえ、見守る勇気も必要である。そして紆余曲折しながら互いの意見に折り合いをつけ、合意形成を図っていく。杉田洋（2009）は折り合いのステップとして5つの段階を挙げ、「多様な意見があることを知る」という個人の気付きで始まるステップ1の段階から、「集団決定によって苦しい人や悲しい人がでてこないのか」と他者を気遣う段階を経て、「自分の意見が通らなくても一緒に活動している人がいる」ことを理解し、相手への心遣いをしながら活動するというステップ5の段階へと合意形成を発展させていく必要があると述べている（図2）。どうしても全員の合意が図られない場合は一部条件をつけて合意形成を図ることも考えられるが、大切なことは合意形成に向けて努力をさせる経験を積ませることである。

「実践」の場面では、自発的・自治的に決定したことを互いに確認しながら実践していく場である。時にはくじけそうになっても「みんなで話合って決めたことだから」と励まし合ったり協力し合ったりする中で、一人の力は小さいが仲間と協力することにより大きな力へと発展できることを生徒は学んでいくのである。

「振り返り」の場面は、活動を反省するとともに、自己評価や他者評価を通して互いを認め合い、体験を通して得られる新しい自分の発見など、よりよい方向へと変化する達成感や充実感を実感させる場である。そのことが自己肯定感や自己有用感につながり、その後問題が起こっても前向きに乗り越えようとする意欲に変わっていくのである。

(4) 話し合い活動のプロセスを意識した指導

一連のプロセスを通して実施される話し合い活動であるが、実際の学級活動は生徒会や学校行事との連動、専門家による講話などの活動が実践され、全プロセスを実施できる時間は限られている。さらに中学校は教科担任制で授業の入れ替えも難しく、放課後は課外活動でまとまった時間は当てにできない状況である。そこで、それぞれの学級活動内容における実施可能なプロセスを選んで活動させる（表2）。

表2 年間指導計画との照合

項目	学級活動内容	話し合い活動のプロセス	問題の共有	計画	話し合い	実践	振り返り
1	学校全体に関わるもの(生徒会関係、学校行事など)	◎	○	◎	◎	◎	
2	学級全体に関わるもの(目標、きまり、係活動、学期の反省など)	◎	◎	◎	◎	◎	
3	個人に関わるもの(進路、生活習慣、悩みなど)	◎	○	◎	◎	◎	
4	学級の雰囲気づくりや人間関係づくりに関わるもの(SGEやSSTなど)	◎	○	◎	○	○	
5	講演会や学年朝会などの統一学活	◎	○	◎	○	○	
◎は必要なプロセス ○は状況に応じて取り入れるプロセス							

項目1と2については、学級活動(1)の内容に関するものであり、学校行事のテーマや役割分担、学級目標や係活動といった集団決定が成されるものである。そのため一連のプロセスで実施することが望ましい。ここでは生徒同士の話し合いを通して決定したことを実践し、振り返りというプロセスを大事にすることで、自主的、実践的な態度の育成につながっていくと考える。

項目3は学級活動(2)、(3)の内容に関するもので個人決定を促す内容であることから、問題の共有を特に意識する必要があると考える。個人の内面に関わることもあるので、話し合いの方法やその内容の扱いについて十分配慮しながら、どの生徒にも当事者意識を持たせることが最大の課題である。特に思春期に関連する問題やいじめの問題などデリケートな内容については、教師主導で行うほうが望ましいと考え、計画の部分は状況に応じて取り入れるプロセスとしている。また、

学級や学校全体の活動に発展する内容や養護教諭や専門家を生かした指導を必要とする内容については、項目1、2、5に沿ったプロセスと関連していくことを考慮しておく必要がある。

項目4は構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニングなどを用いて学級の雰囲気づくりや人間関係づくりに関わるものを扱い、話し合いを活性化させるための方法や形態を工夫する必要がある。

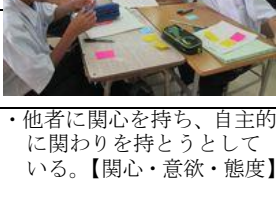
項目5は統一学活であり、あまりどのプロセスも意識しないことが多い。そこで、事前に題材について考えさせておくことで問題の共有を図ったり、帰りの会で感想を発表させ意見交流を行うなど話し合いのプロセスを取り入れることができると考える。

話し合い活動は生徒が主体的に成長していくための原動力であり、それは教師側からの意識づけによって大きく影響される。そもそも活動を生徒に任せるということは計画や準備等も含めて時間がかかる上に、失敗のリスクも考えられる。見守ることの大切さを理解していても、教師は事前に失敗を回避しようとすることを選びがちである。生徒の主体性を育てる場を教師があえてつくらなければ、いつでも教師に頼ってばかりの受容的な生徒が育っていくことになりかねない。「成すことによって学ぶ」という特別活動の指導原理のもと、生徒同士の相互作用を起こし成長させる活動として話し合い活動のプロセスを積極的に取り入れることが求められる。

Ⅲ 指導の実際

本研究では、年間指導計画に沿った5月から7月の学級活動内容について検証を進め、話し合い活動のプロセスの意義を考慮しながら考察する。「テストに向けて意欲的に学習しよう」という題材内容については、話し合い活動の一連のプロセスに従って全5時間の取り扱いで授業を行い、その他の題材内容については、話し合い活動の各プロセスを意識した授業を行った。

1 検証の計画（学級活動5月～7月）

日時	活動の場			活動の内容	指導上の留意点	目指す生徒の姿と評価観点	意識するプロセス
	授業	の朝会・帰	放課後	話し合い活動をハッピークラス会議（ハピクラ会議）、その他の活動をハッピークラス活動（ハピクラ活動）と名付けて、学級活動を実践した。			
5/12		◎		学習に関するアンケート実施	学習に関する悩みを掌握する。		
5/14			◎	生徒会の学習委員会に協力してもらい、学習に関する質問に対して上級生からアドバイスを書いてもらう。	・2、3年生の各クラスの学習委員から多様なアドバイスをもらう。		
5/26	◎			☆ハピクラ活動「グループエンカウンター」 〔2〕オ パスデーリング、さいころトーク	・楽しい雰囲気ですべて話し合うことを目的とする。		他者に関心を持ち、自主的に関わりを持つとしている。【関心・意欲・態度】
5/29	◎			☆第1回ハピクラ会議「本当の友達とは？」 〔2〕ア	・教育相談で新しい環境における人間関係に関する悩みの相談があり、それを受けて題材を設定。	・友達と自分の関係について関心を持ち、よりよい関係とはどういうものなのか自分なりに考えをまとめ、発表している。【思考・判断・実践】	話し合い
6/3	◎			☆第2回ハピクラ会議「学ぶこととは？」 〔3〕ア	・学ぶことについて多角的に考えさせ、中学校初めての定期テストに向けて学習意欲を高める。	・学ぶことの意義を理解している。【知識・理解】	問題の共有 話し合い
6/3			◎	学級活動委員会 6/4のハピクラ会議の計画	・クラス会議の計画を立てる。 ・事前の活動の確認をさせる。	・学級の充実と向上に関心を持ち、クラス会議の計画や準備に自主的に取り組もうとしている。【関心・意欲・態度】	問題の確認 計画
6/4	◎	◎		第3回ハピクラ会議「学級の学習モードをつくろう」学級全体で取り組める目標を見つける。 〔3〕イ	・朝の会で活動シートに自分の考えをまとめさせておく。 ・グループ討議を行い、意見がしやすい雰囲気をつくる。	・学級集団で学習意欲を高めるために、自分の考えや意見を出し、自主的に取り組もうとしている。【関心・意欲・態度】	問題の共有 話し合い
6/4			◎	学級活動委員会 6/8の話し合い活動の計画	・クラス会議の計画を立てる。 ・事前の活動の確認をさせる。	・学級の充実と向上に関心を持ち、クラス会議の計画や準備に自主的に取り組もうとしている。【関心・意欲・態度】	問題の確認 計画

6/8 (事例Ⅰ)	◎	◎		☆第4回ハビクラ会議「自分にあった学習スタイルを見つけよう。」 勉強方法を見直し、グループの仲間からアドバイスを受ける。 【(3)イ】	- 朝の会で活動シートに自分の考えをまとめさせておく。 - 相手の意見やアドバイスを否定しないようにする。 - 実践できるものをみつけさせ、個人目標として掲示する。 - 学習委員会の上級生からのアドバイスを紹介し掲示する。	自己の能力や適性に合った学習方法を考え、具体的な学習目標の下、学習に取り組もうとしている。【関心・意欲・態度】	問題の共有 話し合い
6/22	◎			☆ハビクラ活動 「自分の特色を知ろう」 リフレーミング、いいところ探し 【(2)イ】	互いの良さを認め合いながら、新しい自分の良さを発見できるようにする。	互いの良さや学びあうことの意義や自他の個性について理解している。【知識・理解】	話し合い
6/24	◎			☆第5回ハビクラ会議「係活動を見直そう」 【(1)イ】	学級の様子から前回の自分の特色と照らし合わせて係活動の見直しを行う。	学級の実態を踏まえ、よりよい学級づくりに必要な係活動について考え、理由を示して発表している。【思考・判断・実践】	問題の共有 話し合い
6/29			◎	学級活動委員会 7/3の話し合い活動の計画	- クラス会議の計画をたてる。 - 事前の活動の確認をさせる。	学級の充実と向上に関心を持ち、クラス会議の計画や準備に自主的に取り組もうとしている。【関心・意欲・態度】	問題の確認 計画
7/3	◎			☆第6回ハビクラ会議「話し合い活動の振り返りについて」 【(1)ウ】	- 一連の話し合い活動のまとめである振り返りのプロセスの大切さを理解させる。 - グループ討議で学級の取り組みを振り返らせる。	よりよい生活の充実と向上を図るために振り返りを行うことの大切さを理解している。【知識・理解】	問題の共有 話し合い
7/3			◎	学級活動委員会 7/6の話し合い活動の計画	- クラス会議の計画をたてる。 - 事前の活動の確認をさせる。	学級の充実と向上に関心を持ち、クラス会議の計画や準備に自主的に取り組もうとしている。【関心・意欲・態度】	問題の確認 計画
7/6 (事例Ⅱ)	◎			☆第6回ハビクラ会議「1の5テスト取り組み反省会」 【(3)イ】 活動の振り返り	学級と個人の目標を振り返り、グループで改善点について話し合い、次の活動のステップにつなげる。	これまでの活動を振り返り、取り組みの良さや改善点について考え、次の課題へとつなげようとしている。【思考・判断・実践】【関心・意欲・態度】	問題の共有 話し合い 振り返り

2 検証事例 (対象学年 1学年)

検証事例として、中学校最初の定期テストを迎える生徒に「学級の学習モードをつくろう」、「自分に合った学習スタイルを見つけよう」という2つの議題・題材の下、集団決定、自己決定を行い活動させた内容を取り上げる。

(1) 題材名 「テストに向けて意欲的に学習しよう」

(3) 学業と進路 イ 自主的な学習態度の形成と学校図書館の利用

(2) 題材目標

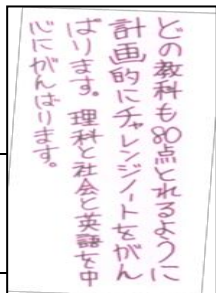
- ① 題材に関心を持ち、自分の考えをもって話し合うことができる。
- ② 互いの良さに気付き、協力しながら活動に取り組むことができる。
- ③ 活動の振り返りを行い、よりよい自分やよりよい学校生活を目指して新たな目標を持つことができる。

(3) 題材設定の理由

小学校と中学校の学習の違いから生じる悩みや不安を持ちやすいこの時期に、効果的な学習方法についての関心を高め、話し合い活動を通して学級の仲間と協力し合いながら自主的、実践的に取り組むことが大切だと考え、この題材を設定した。

(4) 指導事例Ⅰ (6月8日 5校時実施)

- ① 目標 他者との交流を通して、自分に合った学習方法を考え、定期テストに向けて目標や学習計画を立てるなど自主的に取り組もうとする態度を育てる。
- ② 展開

	学習活動	意識したプロセス	指導上の留意点	資料等	評価の観点と評価方法
導入	1. クイズ「みんなの勉強時間の平均は？」 2. 授業のめあてを確認する。	・計画 ・問題の共有	・シナリオに沿って生徒司会で授業を進めさせる。 ・アンケートの結果を自己の問題と照合する。	・生徒アンケート結果と平成26年度全国学力・学習状況調査の質問紙調査結果からクイズ作成 ・電子黒板	
展開	3. これまでの自分の学習の取り組み方を振り返らせる。 4. グループで効果的だと思う勉強方法を出し合う。 5. グループ内で確認した方法を全体で発表する。	・話合い	・ウェービングで勉強方法をできるだけ多く考えさせる。 ・付箋紙を使って、意見交流をしやすくする。 ・多様な意見を全員で共有させる。	活動シート ウェービング用紙 付箋紙 画用紙 	・自己の能力や適性に合った学習方法を考え、具体的な学習目標の下、学習に取り組もうとしている。【関心・意欲・態度】 (観察・活動シート)
まとめ	6. 自分に合った学習方法とテスト目標を決定し、活動シートに記入する。		・多様な意見を参考に、自己決定を行わせる。		目標設定

(5) 指導事例Ⅱ（7月6日 5校時実施）

- ① 目標 これまでのテストの取り組みを振り返らせることで、一連の話合い活動のまとめを行い、新たな活動への意欲を高める。
- ② 展開

	学習活動	意識したプロセス	指導上の留意点	資料等	評価の観点と評価方法
導入	1. 授業のめあての確認をする。 2. 教師の話 中間テストの学級平均と学年平均との比較	・計画 ・問題の共有	・シナリオに沿って生徒司会で授業を進めさせる。 ・学習の振り返りを真剣に行うことの大切さを確認させる。		
展開	3. テストに向けてのこれまでの取り組みを振り返りシートで行う。 ①学級での取り組みについて ・家庭学習と授業態度を良くするために実践したことの評価 ②個人の取り組みについて ・テスト目標と勉強方法を振り返り、良い点、改善点をまとめる。 ・取り組みでうまくいかなかった点に対して、グループ内で意見を出し合う。	・話合い ・振り返り	・前時にグループで話し合った内容を発表する。 ・次回も引き続き取り組んでいくかも確認する。 ・付箋紙を使ってそれぞれの取り組みに対して互いに改善方法をアドバイスする。	・振り返りシート ・ポスター ・付箋紙 	・これまでの活動を振り返り、取り組みの良さや改善点について考え、次の課題へとつなげようとしている。【思考・判断・実践】【関心・意欲・態度】 (観察・振り返りシート)
まとめ	4. 振り返りシートをまとめる。 5. 教師の話		・振り返った内容を次の活動（期末テストや夏休みの宿題等）に生かせるようにする。		

3 研究仮説の考察

研究仮説に基づいて、話合い活動とそれを通して培われる人間関係についてのアンケートを事前（5月26日）と事後（7月7日）で行い、その変化を分析した。特に、毎時の授業の様子や活動シートの中から、話合い活動のプロセスを意識した指導をすることによる生徒の活動の高まり、活動後の生徒の人間関係に対する意識の変化を中心に考察する。

(1) 話し合い活動の活性化につながるプロセス

① 問題の共有の場面

話し合う内容についてのアンケートの結果やそれに関連する映像を紹介して問題の共有を図った。検証後のアンケートでは、「問題はみんなで話し合いで解決したほうが良いと思いますか」という項目において88%から92%へ、「わからないことがあったら、クラスの誰かに聞いて解決しようとしている」で84%から88%へと増加がみられた(図3と図4)。このことから勉強方法を互いにアドバイスするという活動を通して、少しずつ他者への関心が高まり、集団で問題を解決していこうという意欲の向上につながったと考える。

しかし、授業では自己の学習課題に対して「わからない」、学習目標に対して「がんばる」といった抽象的な答えのみを書いて時間を持て余している生徒もおり、問題の捉え方には個人差があることを痛感した。問題の共有の有無がその後の話し合い活動に大きく影響することを踏まえると、個人の問題というよりも集団という枠組みで話し合いが必要であること、今は必要性を感じなくても将来必要になることなど考える視点を与え、その内容について話し合うことが意義のあることだとしっかり押さえることが重要である。

また、道徳や総合的な学習の時間との連携を積極的に図り、問題の共有を深化させることも考慮すべきである。

② 計画の場面

今回は、放課後に計画委員会を開き、授業の準備を行った。最初は放課後の時間が拘束されることについて不満を述べていたが、計画委員会の回数が増えるにつれて、最近では「司会をやりたい」という前向きな意見や「司会の緊張感がわかった」という相手の気持ちや立場を察する意見があり、少しずつではあるが自主性がでてきたと感じている。時間はかかるがリーダーを育てる意味では重要なプロセスであり、継続して実施していきたい。また、全生徒が計画に携わる必要があり、当番や係活動を通じて協力と呼びかけるなど、参画意識を持たせる工夫も必要である。

③ 話し合いの場面

ウェービングやKPTシートなどの思考ツールで自分の考えをまとめさせ、付箋紙やホワイトボードを使って全員の意見がでるように工夫した。その結果「自分の意見を話すときは、なぜそうなのか理由を考えて話している」という項目において73%から85%の増加がみられた(図5)。同様に、「話し合いで周りとの意見が違っても自分の意見を伝えようとしている」という項目においては増加がみられた。

しかし、「あなたはクラスのみんなに自分の意見や考えを話したいと思いますか」という項目においては96%から81%への減少がみられた(図6)。

これらのアンケートの結果から、グループ内では少しずつ打ち解けてきたが、まだクラスみんなに意見を言えるほどではないと考える生徒が多いといえる。

また減少の原因として、集団決定を行う際になかなか意見がまとまらず、折り合いを付けるために放課後残ったことが大きく影響していると考えられる。表3はそのときの生徒の感想を抜粋した

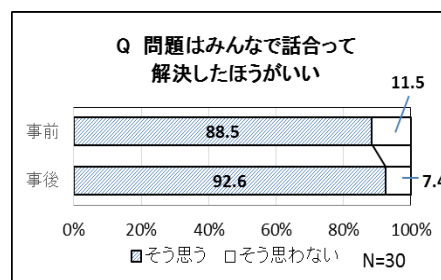


図3 問題解決と話し合い

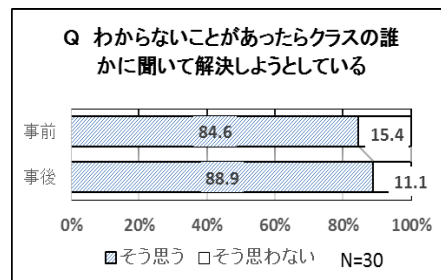


図4 仲間への信頼感

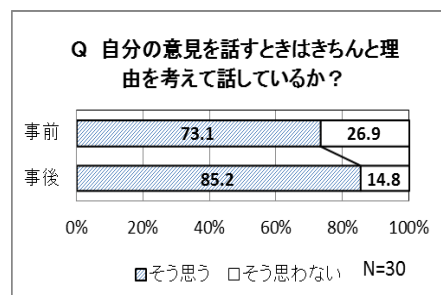


図5 根拠のある意見

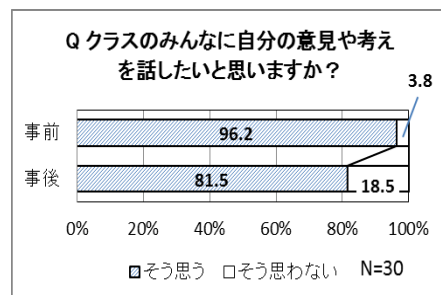


図6 学級全体の意見交流

表3 折り合いの難しさ(活動シートより)

- 自分の意見が通らなくて少しイライラした。みんなに次はわかりやすく伝える。
- 譲り合いがないし、しかも新しい意見をだしたら「いや」とか言う人がいたから楽しなかった。
- いろんな意見があってもおもしろかった。だけど、他の人の意見を認めることも大切だと思う。
- 言い争いになったけど、自分が言いたいが言えたので良かったです。私は全部の意見を合体させた方がいいと思った。

ものである。教師の視点からすると、反対意見もでるような多様な意見交流こそが理想で、その中から折り合いの大切さを学び、他者と自分との関わり方を考え、互いに良い関係を築こうとする態度が育まれることを狙いとしているが、反対意見の出し方や折り合いの仕方を押さえ、個人の争いに発展しないように注意しながら、生徒の成長を見守っていくことが大切である。

④ 実践の場面

集団の学習意欲の高まりを狙い、「授業態度をよくする」、「家庭学習を毎日行う」という2つを集団決定し3週間ほど実践した。授業態度については、毎時間各教科担当者から日誌に評価を記入してもらい、家庭学習については、その提出状況を調べて帰りの会で毎日発表して振り返らせた。その結果、集団実践では、授業態度、家庭学習それぞれ1回だけ「C」評価だったが、それ以外は「A」評価であった。生徒の感想にも「みんなの授業態度が変わり、チャレンジノートをする人が多くなった」、「前よりももっと前向きになった」、「Aをとろうと頑張った」など、全員で一つのことに取り組もうとする肯定的な意見がみられた。

一方、個人決定の実践では、「みんなの学習方法や意見が聞けてクラスみんなと打ち解けることができた」、「勉強は苦手だったけど改めてがんばろうと思った」、「やる気がでた」などの意見が多く、個人の学習が学び合い、教え合いに発展したといえる。「一人ではできない、やる気が起きない」といった個人の悩みが集団での実践により解決へ結びついたといえる。また、決定事項については96%の生徒が「クラスで決めた決まりや約束を守ろうとしている」と答えており、集団との関わりを重視していることがわかる。このことから、話し合いを通して他者との関わりを持たせる取り組みは有効であったと考える。

⑤ 振り返りの場面

集団や個人で取り組んできた内容について「良かった点、うまくできなかった点、改善点」の3項目で話し合いの振り返りを行った。振り返りのさせ方は、グループ内で相談して意見をまとめる活動と互いにアドバイスし合う活動であった。そこにはグループの司会の指示に従い話し合いを進めて行く過程で、以前より身を乗り出して話し合いに参加する様子が見られた。また、付箋紙によるアドバイスの交換では、自然に「ありがとう」という言葉を交わし、うれしそうな笑顔が印象的であった。さらに、次の目標設定については、「友達からわからないことは聞く」、「友達からもらったアドバイスを生かす」といった他者との関わりが感じられ、振り返りの場면을肯定的に捉えるとともに学級の仲間への信頼感がうかがえた。

(2) よりよい人間関係を築こうとする態度の深まり

学級の事後アンケートによると、話し合い活動を通してクラスの雰囲気が変わったとする生徒が63%、変わらないとする生徒が37%で過半数が学級の変化に気づいている(図7)。その理由として意見交流が増え、学級が明るい雰囲気になったことを挙げている(表4)。この時期は中学校生活に少しずつ慣れ、自分自身を表現し自ら他者と関わりを持つようになるが、「いろんな人と討論できた」、「上手に話し合えるようになった」、「ハピクラで決まったことをみんなで協力して行っている」などの生徒の感想から、話し合い活動を通して人間関係の深まりを実感し始めていることがわかる。実際、グループの話し合いでは、普段おとなしい生徒や集団活動に関心が薄い生徒も、相手のためになにかしら自分の意見を伝えようと頑張っている姿や、集団としての意見をまとめる際に「これでいい?」と他者の思いを確認する場面が見られるようになった。

さらに、「自分の特色を知ろう」という構成的グループエンカウンター授業では、リフレーミングやいいところ探しの活動を通して自己理解や他者理解を深め、自己肯定感を感じている様子がうかがえる(表5)。「またやってみたい」という感想も多く、問題の共有において、生徒一人一人が話し合うことの必要性や有用性を感じられたことが大きな成果につながったと考えられる。

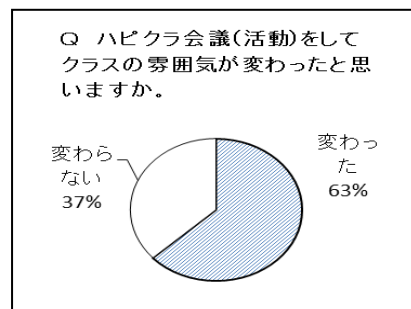


図7 学級の変容
(学級アンケートより)

表4 クラスの雰囲気がどう変わったか(学級アンケートより抜粋)

- ☐ 自分の意見をいう人が増えた。
- ☐ みんなが生き生き明るくなった。
- ☐ みんなとたくさん話したりしてクラスに打ち解けることができた。
- ☐ クラスについてみんないろいろ考えた。
- ☐ いい感じになった。
- ☐ いろんなところで意見がでるようになった。
- ☐ このクラスが楽しくなった。

一方「ハピクラ会議をこれからも続けた方がいいと思うか」というアンケート結果では、やや「続けた方がいい」という意見が多くなったがその差はさほど大きくない（図8）。

「続けた方がいい」と答えた生徒の感想からは、学級の雰囲気を明るくし、問題解決の手段として話し合い活動の良さを認めている表現が多く見られた（表6）。

「続けない」と答えた生徒の感想からは、「クラスの変化を感じない」「面倒」といった意見がほとんどであった。「変化を感じない」ことについては、5月に実施したQ-Uアンケートの結果から学級生活満足群の割合が6割近いこともあり、学級や学校生活において話し合い必要性を感じる深刻な問題がないという見方ができる。しかし言い換えれば、問題の共有において自分の身の回りのことに関心を持ち、意欲的に現状をよりよく変えていこうとする意識付けが不十分であったため変化を感じることができなかったとも考えられる。また「面倒」という意見については、事前の準備や意見をまとめることに時間がかかったことが影響したと思われる。今後は学校行事やレク的な集団活動など、より一層人と人との関わりが重視される活動において、「面倒でも自分のためになるし、仲間と一緒にだとんだか楽しい」という連帯感や達成感を生徒に持たせることができるように話し合い活動を工夫し継続していきたい。

表5 生徒の感想
(活動シートより)

3. 今日の授業を聞いて考えたことを書こう。
私は短所が長所になって
少し自信がもてた。長所はこ
れにあると思えていた。も
う、とてもうれしかった。も
う、いい所をたくさん見つけ
ていきたいと思った。

Q ハピクラ会議（活
動）はこれからも続けた
方がいいと思いますか。

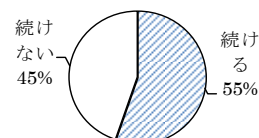


図8 学級アンケートより

表6 ハピクラ会議をこれからも続けたいか、続けないかの理由（抜粋）

- | | | | | | |
|------------|----------------------|------------------------------------|----------------------------------|------------------|-----------------|
| 【続けた方がいい】 | ○みんなが楽しく笑顔になる気がする。 | ○みんなで問題を解決できるから。 | ○問題をしっかりと話し合えるから。 | ○話し合いは社会にでもあるから。 | ○みんなの雰囲気が変わるから。 |
| | ○クラスがもっと良くなるから。 | ○クラスのみんなで話し合えるしコミュニケーションをとれると思うから。 | ○楽しかったし、もっとみんなで頑張ろうという気持ちになったから。 | | |
| 【続けない方がいい】 | ○クラスの雰囲気はあまり変わらないから。 | ○面倒くさい。 | ○話し合いをしたらみんながうるさくなるから。 | ○放課後残るのは嫌。 | ○自分で解決する。 |

これまでの話し合い活動のプロセスを意識した指導を通して、教師の生徒を見る視点が変わり、生徒の自主性を引き出すことや集団を通して個を鍛えることの大切さなど特別活動の持つ意義やねらいに迫ることができたと思う。また、生徒主体の活動が増え、生徒同士の関わりが深まったことで、自分と他者とのよりよい関係性を作ろうとする生徒の変容を見ることができた。

このように学級での日常的な人と人との関わりを通して、他者と共生・協働しながら自己実現を図っていく話し合い活動は、生徒にとって今後のグローバル社会を生き抜くための必要不可欠な力となり、より一層その意義を深めていくと確信している。

IV 成果と課題

1 成果

- (1) 話し合い活動のプロセスを意識した授業により生徒同士の交流が活性化し、これまでの教師主導の学級活動から生徒主体の自主的な活動へ近づくことができた。
- (2) 話し合い活動を通して生徒が自分と他者との関わりを意識するようになり、互いによりよい関係性をつくろうとする態度がみられた。
- (3) 学習委員会の上級生から下級生へ学習アドバイスをする実践を行ったことで、生徒会と学級との縦の連携や異年齢の交流の重要性に気づいた。

2 課題

- (1) 話し合い活動で要となる「問題の共有」において、生徒の当事者意識を高め、話し合う必要性を認識させるための工夫が必要である。そのため各教科、各領域との連携を図り、話し合う内容をいかに深化させ充実したものにしていくかが課題である。
- (2) 生徒の現状と発達状況を捉え、小集団から学級全体の話し合いへと段階的に話し合い活動を発展させていくためのワークシートや発表方法を工夫する。

〈参考文献〉

- 赤坂真二 2015 『THE 教師力ハンドブックシリーズ クラス会議入門』 明治図書
- 文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター 2014 『学級・学校文化を創る特別活動 中学校編 学級活動の基本－話し合い活動を中心にして－』
- 菊池省三・菊池道場 2014 『コミュニケーション力あふれる「菊池学級」のつくり方』 中村堂
- ベネッセ教育総合研究所 2014 『VIEW 2 1 (小学版) Vol. 2』
- 加藤辰雄 2014 『誰でも成功する言語力を高める話し合い指導』 学陽書房
- 2014 2013 『道徳と特別活動』 文溪堂
- 田中博之 2013 『学力向上プロジェクト「こんなクラスにしたい！」を子どもが実現する方法 小・中学校編』 金子書房
- 菊池省三 2012 『教育技術 MOOK 菊池省三の話し合い指導術』 小学館
- ベネッセ教育総合研究所 2012 『VIEW 2 1 (小学版) Vol. 4』
- 多田孝志 2011 『授業で育てる対話力ーグローバル時代の「対話型授業」の創造ー』 教育出版
- 吉澤克彦 2001 『構成的グループエンカウンター・ミニエクササイズ 50 選 中学校版』 明治図書
- 国立教育政策研究所 2011 『評価基準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校特別活動編）』
- 文部科学省 2011 『「中学生熟議」のすすめ 子どもたちの話し合いと実践で創り出すよりよい学級・学校生活（中学校版）ー特別活動で育む「生きる力」ー』
- 日本特別活動学会 2010 『小学校・中学校・高等学校学習指導要領対応 新訂 キーワードで拓く新しい特別活動』 東洋館出版社
- 杉田 洋 2009 『よりよい人間関係を築く特別活動』 図書文化社
- 文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説 特別活動編』
- 森 時彦・ファシリテーター道具研究会 2008 『ファシリテーターの道具箱ー組織の問題解決に使えるパワーツール 49ー』 ダイヤモンド社
- 河村茂雄 2001 『グループ体験による学級育成プログラム ソーシャルスキルとエンカウンターの統合』 図書文化